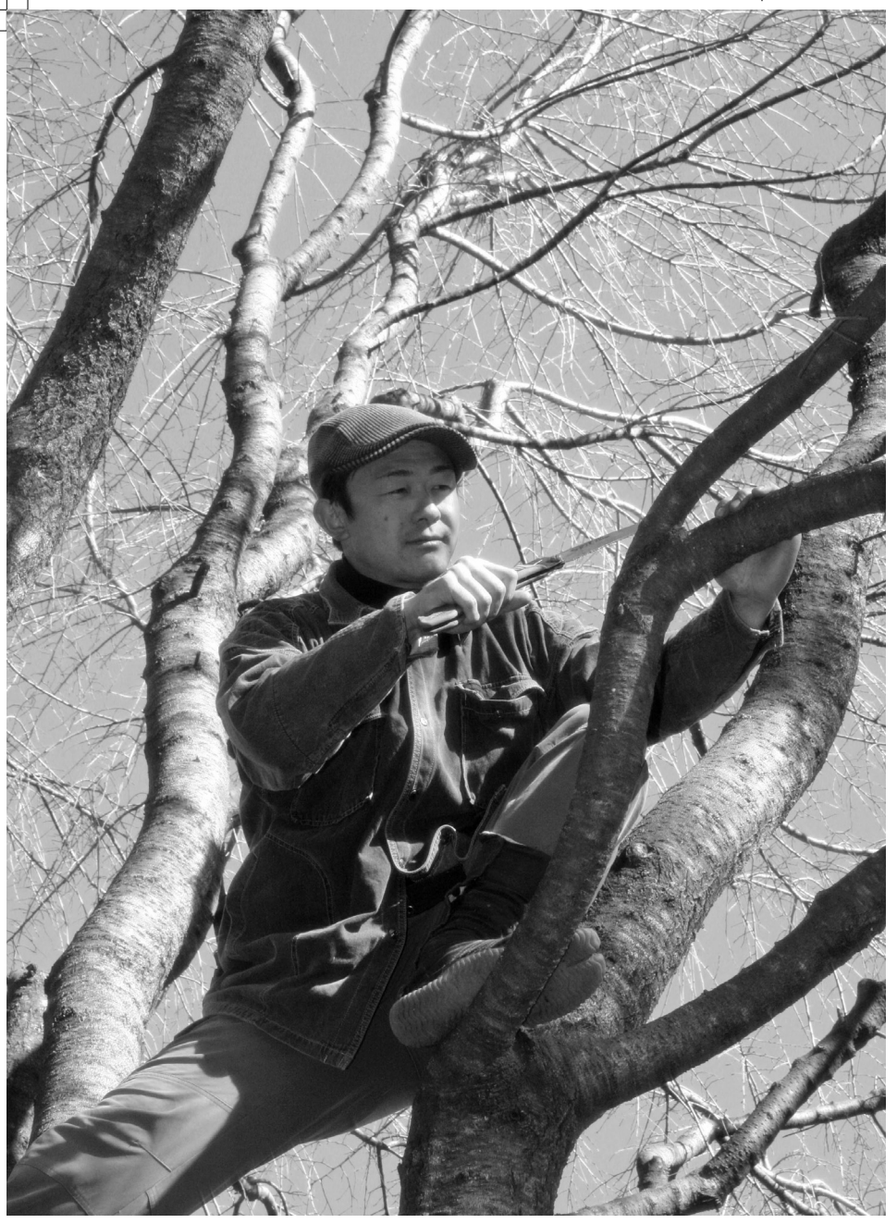
ぐんまお仕事図鑑

患者はもの言わぬ「樹」志高き、若き"桜守り"

「樹木医」は、巨樹・古木の診断や治療をはじめ天然記念物などの後継樹の保護・育成、樹木保護に関する知識の普及・指導を行う専門家。県内外で樹木医として活躍する塩原 貴浩さんに話を聞いた。



幼いころから家業である造園業を手伝い、当たり前のように土と木に触れて育ったという塩原さん。学生時代から造園についての知識と技術を学び、大学院卒業後、京都の老舗「植藤造園」佐野藤右衛門氏の下で5年の修行を経て帰郷。「樹木医」の資格を取得した当時はまだ20代で、全国でも異例の若さだった。今では造園業に携わるかたわら、県内外で樹木医として活躍している。

「言葉を話せずその場から動けない『樹』が相手の樹木医の仕事は、広い知識が必要。樹種やその特性について、土壌や気候風土、剪定の技術、動物や昆虫・菌類の知識……覚えることは無限です」

患者は、大切に育てられてきた庭木や地元の人たちを見守り続けてきた神社の御神木など。診断や治療も長い年月を要することがあり、カルテは欠かせない。

「樹木の寿命は、長いもので100年以上。後継者の代になっても管理ができるよう、診断書を作成しておくのです」

〝診察〟するためにはノコギリを担いで木に登ったり、ときには貴重な古木がひっそりと生きる山深い場所へも幾度と無く足を運んで経過を観察するなど、肉体的な強さも必要だ。

またサクラ類を専門とする塩原さんの元へ舞い込む治療依頼は、サクラが多い。

「思い出深いのは、長野との県境にほど近い旧六合村小倉のシダレザクラ。地区の皆さん総出で老若男女力をあわせて作業を分担し、最小の費用で最大の効果を出せました。花を咲かせなかった木が一面に花を付け、それをみて喜ぶ依頼者の顔を見たとき、樹木医としてのやりがいを感じますね」

平成20年には、能の謡曲「花筐（はなかたみ）」に登場する城福寺（福井県）の「ハナガタミノサクラ」という珍しいサクラの診断・治療も手掛けた。これは日本に1本しかない貴重な個体だ。

「サクラは開花している一週間ほどの期間だけ脚光を浴びるけれど、それ以外は誰にも意識されない存在。私は逆に、開花までの360日をサクラのために尽くす、〝桜守り〟と呼ばれるような樹木医でありたいですね」

旧六合村・小倉のシダレザクラ（通称「千年桜」）。治療後は、見事な花を付けるようになった。

粘土の含有量など、「土性」を判定する土壌診断。土の状態が木の生育状態を大きく左右する。

取材協力／
万葉園グリーンサービス
前橋市田口町200
☎027-232-1258